

原 著

キリスト教教育における「身体」の意義

東 彩子*

＜要 旨＞

本論文は、キリスト教教育において見落とされやすい「身体」の意義について論じることを目的とした。心身二元論に偏りがちであるキリスト教界の傾向を問題提起とし、創世記におけるユダヤ教的心身一体の人間観に立ち返る試みとして、創世記1章27節と2章7節について、モルトマン、パネンベルクを中心とした現代神学を土台として考察した。これを踏まえ、新約聖書における「身体」に関する代表的な記述であるIコリント12章の「キリストの体」に関するパウロの神学を取り上げ、現代のキリスト者へ問題を提示すると共に、キリスト教教育における「身体」の意義について考察を行った。

キーワード：キリスト教教育、身体、キリストの体、キリスト教保育

I 問題提起

なぜ、キリスト教教育の課題として「身体」を扱うのか。この考察の動機には2つの点があげられる。第一に、キリスト教の授業は座学による知識習得型¹が多いということに挑戦し、筆者が担当する「キリスト教保育」で、聖書物語の解釈やキリストの体などの内容を、聖劇の制作を通して「身体」を含む全身を使った体験として学ぶ実践をしている²点があげられる。第二に、キリスト教界では、イエス・キリストの生涯や「からだ」のよみがえりを重要な出来事として伝承し、「イエスのからだ」を食する儀式を典礼の中心に据え、教会をキリストの「からだ」と呼び、終わりの日の「からだ」のよみがえりを待望しているにも関わらず、霊的生活は身体や肉のものに対する戦いとみなされることが多く、「身体」に敵意をあらわにするような二重性が存在する³点への問いがあげられる。

聖書にはもともと肉体と靈魂を分ける二元論はない⁴が、二元論がキリスト教に影響を与えてきた事実は避けて通れない。心身二元論は、アリストテレスをはじめ古代ギリシアにおいて知識論、心の哲学、生命論など開拓的な論究がなされたが、特に、近代においてデカルトが、思考や意識を本性とする〈精神〉と、延長を属性とする〈物質〉とを相互に独立の実体とみ

なす二元論 (dualism) を主唱して以来、この精神と身体との関係が近代哲学の主要問題を構成した⁵。しかし、パネンベルクは、この二元論はキリスト教的人間観の本質に属する思想ではないと提唱している。初期キリスト教においては、2世紀半ばから台頭してきた新プラトン主義に対し、人間における肉体と霊の統合を基礎とし、双方揃って初めて一人の人間が形成されるという霊肉の統合が強調されていた。しかし、その結果、人間の身体と魂の一致に重点が置かれているとはいえ、肉体と魂の二元論もキリスト教の人間像に反映されてしまった。そしてこの頃から、当時のヘレニズム教育の影響により、肉体と霊を別の物とする二元論がキリスト教における人間観へ影響を及ぼし始めた⁶。この心身二元論の影響により、身体は精神より劣るもの、精神は身体を支配するものとして精神の優位性が提唱され、身体を罪の象徴とする見方が影響し、キリスト教史の中にもその痕跡が色濃くみられた⁷。このように、キリスト教的人間観は、元来心身一体としての理解を持つユダヤ・キリスト教の流れから外れたものに変化してしまった。このような流れがある中、心身一体もしくは人間を全体像として捉える回帰が、現代神学の中に見られる。そこで本論では、創世記1-2章における「身体」と、Iコリント6章の「体」の現代的アプローチから、キリスト教教育における「身

* 西南女学院大学短期大学部保育科

体」の意義を考察する。

II 創世記 1・2 章における「身体」

1 人の創造と「神の像」(Imago Dei) 創世記 1 章 27 節

旧約聖書では、十戒にあるように、神の偶像の制作や礼拝が禁じられたが、これとは逆に、神は人間を自らの像 (Imago Dei)・似姿として創り、その際、神の像は神の意志と一致し、男女一体の対話的關係に生きつつ共同体を形成して自然界を治めるよう呼び求められていた⁸。

しかし、人間が神の像に創造されたという言葉はキリスト教の人間理解に非常に大きな影響を与え、神学的に多くの論争を呼んできた。人間が神の像の通りに創造されたということの意味に関する神学的な議論は、エイレナイオス (Irenaeus) を始めとする教父神学者たちの論争により始まり、中世のカトリック神学、宗教改革者たちを経て、現代神学のカール・バルトとエミール・ブルンナーの有名な「接点」(Anknüpfungspunkt) の論争に至るまで常に議論の争点となってきた⁹が、ここでは主に、ユルゲン・モルトマン (Jürgen Moltmann) を中心とした現代的アプローチを取り上げる。

神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。(創世記 1 章 27 節)

この箇所からは、文字通り、神の像 (Imago Dei) とはその全体像であり、男女の違いを超えていることが伺える。キリスト教における性に関する議論は、フェミニスト神学を中心に様々あるが、男が女を支配する、男性の聖職者しか認めない、などのキリスト教の歴史が作り上げてきた男女のイメージは、1 章 27 節に立ち返る限り見られない。これは、キリスト教女子教育やキリスト教教育におけるジェンダーの問題を考える上でも特に重要な箇所であり、男女は等しく神の似姿・価値あるものとして創造されたことから、優劣なく互いの存在を尊重しつつ、命の尊厳をもって生きていくという精神を培う土台となっていると言えよう。

モルトマンは、魂が先行し、身体は後に従うという構造を男女に当てはめ、女が男に従う性のあり方において初めて人間は神の似姿になるというカール・バルトの主張、神学的主権論について、一貫して批判して

いる¹⁰。

彼は、この優劣に対する批判を、三位一体の神の一体性は神の支配する主体性と主権の中にあるのではなく、無類の完全な、父、子、聖霊の交わりの中にあるということから出発している。三位一体の神の愛する被造世界に対する関係を一方的に支配関係としてではなく、永遠の愛の豊かさを顧慮し、複合した、またその点において相互的な交わり、関係として理解した。また、神の似姿性を、この神の相互内在 (Perichorese) の文脈において、つまり相互に必要としあい相互に浸透しあう交わりとの関係として理解し、真の人間の交わりは、三位一体の像 (Imago Trinitatis) へと規定されていると説いた。また、「魂の優位」も「肉体の優位」も受け入れることなく、生かされた生命の かたち (Gestalt) に目を向けている。つまり、霊における神の現臨は、意識とか、魂とか、理性と意志の主体性の中だけに配置されるのではなく、人間の有機的組織全体、つまり身体と魂を包括する全体によって環境の中で展開していく、歴史的な かたち の中に配置されるとする。また彼は、人間は環境のフィールドの中で成立するとし、自然、社会、文化、歴史、宗教などに代表される超越的領域からの影響とそれらとの自らの対決が、人間の かたち を形成すると述べている¹¹。

近藤もまた、この神の像、神の似姿とは「神との関係」・「神との交わり」であり、神が共におられることを意味し、神の側からの人間への関係に対し、人間の側からの神への関係が「応答」「対応」であり、これが「神の似姿」であると捉えている。さらに、モーセを通してシナイ契約が交わされたように、「神の契約の相手」とされていることも「神の似姿」であり、これは、人間存在の一部についてではなく、その全体に関わると言う。「身体」を除いた魂や理性にだけ、あるいは精神にだけ限定された応答が求められているのではなく、神の子であるイエス・キリストが理性や精神だけでなく、「身体」も含む全体をもって「神の像」であったように、人間の全体が神の契約の相手として神に応答することが求められる¹²と述べている。このことから、人は、男女の対等な交わりによって誕生し、人間の交わりの中で育ち、一人では生きていくことができない存在として親との相互の交わりが求められると言えよう。

モルトマンにより、人間はその初めから個人としてではなく関係性として創造され、三位一体の神の像は個人の人格の中に宿るのではなく、「人間の交わり」つまり、関係性の中に現れることが示された。男女は

それぞれ神によって神の像、神の似姿に全体像として創造され、相互的交わり、関係性をあわせもち、互いに必要としあう交わりの関係であり、環境の中で展開する有機的組織全体であることが説かれた。現代日本のキリスト教教会は女性が多数を占めるが、聖職者やキリスト教教育を施す者は圧倒的多数の男性神学者によって構成されている。このような日本のキリスト教教育の現場において男女の相互的関わりを重視するモルトマンの視点は重要である。キリスト教研究においては、モルトマン的人間観、つまり、身体を含む有機的組織全体として、男女の性別を超えて関わり、互いに対話を繰り返すことの意義が見えてくる。また、キリスト教教育においても、個人主義の知識習得中心の学びを超え、人と人との関係性に基づく「人間の交わり」や「対話」を重視する必要性が見えてくるのである。

2 人の創造と「命の息 (נַפְשׁוֹ)」創世記2章7節

「神と人」、「男と女」の関係性が現され、「神の像」がその創造物語の根幹をなしている1章27節を含むP典に対し、創世記2章のJ典においては、神が擬人化され、より物語的に語られている。P典との大きな違いは、人「アダム」を深い眠りに落とされ、そのあばら骨の一部を抜き取り、女を造り上げられた部分である。これは人間がそれ自身においては不完全であり、ふさわしい助け手を必要し、彼らは一体となる存在として描かれている。この点に関し、橋本は、眠りに落ちて無力な人「アダム」の時点では性別はなく、「男と女」両方を内在している段階であり、あばら骨を抜き取るという神の手が加わって初めて、互いに「イシュー」「イシャー」と認識するようになったことを強調し、この点においてP典における「男と女」の関係性と根本的な違いはなく、優劣・上下のない対等な関係性であると述べている¹³。この観点からみると、ここで取り上げる2章7節の時点の人「アダム」は、まだ性別がなく、「男と女」を内在していると言える。この関係性を踏まえた上で、心身二元論から心身一体への回帰として、創世記2章7節に関するパネンベルク、モルトマンの説を取り上げる。

主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。(創世記2章7節)

創世記2章7節では、土の塵という物質から作られた人に、「命の息」が吹き入れられ、ここで人は生き

るものとなった、と述べられている。この「息」は、נַפְשׁוֹ (ネシャマー) というヘブライ語であり、息や風、霊を意味する。最初は物質で構成されていた身体に「命の息」が吹き込まれることにより、霊的な存在とされ、神と人格的な交わりを持つことが可能となり、神と言葉で対話することや、神の愛や罪の赦しを受けたり、神へ感謝の応答をしたりする能力を持つこととなったわけである¹⁴。身体に霊が吹き込まれたということは、心身二元論の根源を指しているように思えるが、このことについて小原は、身体と魂が別のものではなく全体として一つであるというパネンベルクの説をあげている。小原は、パネンベルクが、そもそも人間を「心身一体」としてとらえることの根拠をこの御言葉に置いており、魂は体の一部または本質部分ではなく、それは「魂を吹き込まれた身体そのもの」であると理解していると考えており、魂を身体の部分的構成要素、つまり人間が所有している対象物としてとらえることに警鐘を鳴らしている。そして、魂を吹き込まれた身体は、神の霊に生かされており、それ自体の中心に存在の根拠をもつのではなく、他者としての神およびその霊に依存して存在していることを表現しようとしており、身体を根拠づける他者性の問題が重視されている。このように、典型的な心身二元論を批判した上で人間を魂と身体の全体として把握しようとする試みはモルトマンにも見られるという¹⁵。モルトマンは、アウグスティヌスやトマス三位一体における優劣の理解を批判した上で、聖書の創造物語は決して魂の優位を知らず、身体、魂、霊によって人間全体を地上の神の像として説明していると説いている。「体の蘇り」と「新しい地」を将来の世界において待望している者にとっては、支配する魂による体の服従について語ることはできない。したがって、身体と魂は生命を創造する霊の導きのもとで、相互影響の交わり(Perichorese 相互内在)を形成している、と述べている¹⁶。

この相互内在は礼拝にも通じると考えられる。人は命の息を吹き入れられ生きるものとなったというこの箇所から、霊の働き、つまり、神とコミュニケーションを取ることが可能となったわけであり、ここからは、人類に共通して見られる神との対話としての祈り、礼拝、賛美などの起源と通じるものを見出すことができる。そして、全体像としての人間が神に応答する営みの中でも、身体の働きを見落としてはならず、キリスト教の宗派の違いによる身体的特徴や、比較宗教の観点からもこの礼拝における身体の議論は今後の課題となるであろう。

これまで見てきたように、創世記1章27節と2章7節に関するモルトマン、パネンベルクらの視点から、魂と身体には優劣があるのではなく、身体を含む人間の全体像を神の像、神の似姿と見る見方が検証できた。今日では、ホスピスや病院、キリスト教の精神に基づく医療や看護に当たる上では、「ホリスティック医療¹⁷」という言葉がよく使われるようになった。「スピリチュアルケア」「スピリチュアルペイン」「スピリチュアルアセスメント」などの言葉も頻繁に用いられるようになったが¹⁸、これらの言葉は常に身体と切り離すことは出来ない用語であり、医療や福祉の現場では人間の全体像を重んじる見方が主流である。これは医療や福祉現場のみならず、キリスト教教育のあらゆる現場にも当てはまる見方であろう。人間をホリスティックな存在として扱うキリスト教教育のアプローチは、自由学園などのキリスト教主義学校において豊かな実りを得ている例にも見られるように¹⁹、今後もキリスト教教育の土台となることが期待される。

Ⅲ 「キリストの身体」

これまで創世記から「心身一体」が人間の基盤であることを見てきたが、これを基盤に、新約聖書における「身体」に関する記述の中でもIコリント12章を取り上げ、キリスト教教育における「身体」の意義について論じる。

イエス・キリスト、万物に先だって父なる神のもとに存在した神の独り子が、人間となって地上に現れたことによって、救いが出来事となったとする「受肉」の観念は、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」ヨハネ1:14で更に明瞭に定式化される²⁰。受肉した御子は父なる神とどのような関係に立つのか。御子が真に神であると同時に受肉によって人となったとすれば、その御子において神性と人性は互いにどう関係しあうのか。エレイナイオスまでの受肉論の中にすでに内在されていたこの2つの問題をめぐって、3世紀以降、キリスト教世界の全域を巻き込んだキリスト論論争が続けられることとなった。この論争は壮大なテーマとなるためここでは扱わないが、神の子であるイエス「身体」として地上に現れたことから、「身体」はキリスト教の神理解において重要な論点である。

イエスは、当時触れてはならないとされていた重い病気・障がいを負った者や、当時大人に見下されていた子どもたちにも「身体」を通じて触れ、手を置いて

祈り、癒され、生き帰らされ、イエスの「身体」を通しての働きは、重要な神の働きをあらわしていた。また、イエスが鞭打たれ、十字架での拷問に耐え、その「身体」と心の痛みを通して成し遂げられた罪からの救済と、復活のイエスの「身体」に出会った弟子たちに聖霊が注がれ、教会が誕生したことからもわかるように、聖書のイエスに関する記述は常にイエスの人としての「身体」の働きを伴うものであった。ここでは、復活したイエスの「身体」に関するIコリントのパウロの見解を中心に見ていく。

体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。12:17もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでにおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体の一つ一つの部分を置かれたのです。すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようと、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとします。見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。(コリントの信徒への手紙I 12:12-27 新共同訳)

パウロの I コリント 15 章の展開によれば、復活したイエスは「霊の体」をもった存在である。パウロはこれを教会を言い表す表象として I コリント 12 章 27 節で用いている。信徒はキリストの体の肢体とされ、それぞれの肢体の動きが多様であっても体は一つであるように、信徒は相互に他者を尊重し他者の弱さに配慮しなければならないと強調しているが、これは体という概念が本来コミュニケーションの視点から捉えられるべきものであることと合致している。体はそれが見え、その声が届くところにまで延長しているものであり、単に実体的な意味での体に限定されてはいないのである²¹。

ウェブミッシェルは、カント以来の過度な個人主義に偏ってきた西欧のキリスト教教育について警鐘を鳴らし、「わたし」ではなく「わたしたち」という共同体として自らを捉えることの重要性を説いている。生徒や教師の個人的な学習に焦点を当てるのではなく、学習者の協働による共同体としての学びへの転換を示唆している。共同体としての「キリストの体」の一致へと目が向けられること、神との関係の中で「私自身」について一人で考えるところから、私たち一人ひとりが「キリストの体」としての共同体のために何ができ、何をしなければならないかといった問いに向きあうことを促している²²。彼はここで、西欧のキリスト教文化に根ざす「教会」を中心とした教会教育としてのキリスト教教育における「キリストの体」を指しているが、日本におけるキリスト教主義学校に根ざすキリスト教教育は、対象者が信徒ではなく、大部分が信仰をもたない園児・生徒・学生・教職員を対象とするため、彼の説は日本の現状にはそのまま当てはめることは不可能である。

しかし、この箇所を、キリスト教主義学校を「キリストの体」の延長として捉えると、その教育や保育の現場におけるコミュニケーション構築やチームワークビルディングにも応用できる。この視点は、ここ数年、筆者が講師として担当した附属幼稚園や他の幼稚園における教師研修で取り上げてきた。特に、「神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」という箇所の意味を吟味する際には、保育現場で援助の必要な子どもたちや、共に働く教職員への共感と配慮な

どに結びつくことが多い。この箇所は、信仰を持たない教師にとっても共感できる箇所として、研修では反響がある。また、この箇所は「キリスト教保育」における聖劇実践の振り返りの回で取り上げている。学生はこの箇所と、劇制作を通して生じた他者との対話や摩擦、喜びと苦痛などの経験を踏まえ、「どうしてもよい人なんて一人もいない」「自分だけが苦しんでいたと思っていた」など自己と他者の価値と関係性への気づきが与えられることがある。教師（または将来の教師）自らが「キリストの体」の部分であり、互いの価値とそれぞれの役割における使命、一人ひとりがかけがえのない存在であること、などのへの気づきが与えられることは、キリスト教教育・保育の土台となるキリストの愛や神の国の広がりやを自らに内在することとなる。

日本という宣教地において、幼稚園から大学院までを含めると現在約 35 万人もの人が学ぶキリスト教主義学校（短大を含む大学生の数は約 25 万人。日本の私立学校の約 10%にあたる²³）の存在は重要なものである。日本のキリスト者は、このような教会を超えた土壌において、すでに神の業が日々進んでいることに注目すべきである。この国における「神の国」の広がりや、伝統的な教会の教会中心主義を超えて、日々、神が創造された愛する者たちを用いて進められているのである。これからのキリスト教教育の研究に課せられている課題としては、教会中心主義に立つ狭義の意味での「キリストの体」から、キリスト教主義学校や病院や施設などで働くすべての人々を含む広義の意味での「キリストの体」に目をとめ、「わたし」中心に陥るのではなく、「わたしたち」としてとらえ、理論を発展させていくことである。

IV おわりに

本論では、知識習得型に偏る傾向のあるキリスト教教育において、神の像なる人間の全体像としての学びが重要であることを検証した。心身二元論から心身一体への回帰として、創世記 1 章 27 節、2 章 7 節のモルトマンやパネンベルクらによる現代的アプローチから、キリスト教教育における「関係性」「交わり」の大切さが浮き彫りにされたと同時に、全体像としての人間理解に基づく教育の重要性が示唆された。I コリント 12 章の「キリストの体」の考察からは、人間はそれぞれかけがえのない価値ある存在であり、その価値

は「共同体」を意識した他者への尊重に結びつくことを確認でき、一般的にキリスト者が捉える狭義の「キリストの体」から広義の「キリストの体」への視点の転換を提唱した。

今後のキリスト教教育研究としての課題は、キリスト教教育やキリスト教保育の様々な場面で機能している広義の意味での「キリストの体」に着目し、新しい形での教会のあり方や、連携の方法を探ることがあげられる。また、今回は主に日本のキリスト教教育における「身体」について述べたが、今後は、世界に広がるユダヤ・キリスト教の礼拝における「身体」に関して、フェミニスト神学や比較宗教学からのアプローチについても研究を進めていきたい。

参考文献

- Davidson, Robert (1979): The Cambridge Bible Commentary on The New English Bible, Cambridge University Press. 大野恵正訳 (1986) 『ケンブリッジ旧約聖書注解—創世記』 新教出版社
- Green, Garrett (1989): Imaging God, Theology and the Religious Imagination, Harper & Row Publishers, San Francisco.
- Moltmann, Jülgén (1985) Gott in der Schöpfung: Ökologische Schöpfungslehre. München:Chr. Kaiser Verlag= 1991 沖野政弘訳、『創造における神—生態論的創造論』, 新教出版社
- Pannenberg, Wolhart (1991): Systematische Theologie Bd. II. Gottingen: Vandenhoeck und Ruprecht.
- Webb-Mitchell, Brett P (2003): Christly Gestures: Learning to be Member of the Body of Christ, Grand Rapids, MI, 伊藤悟訳 (2019) 『キリスト教的ジェスチャー—キリストの体を生きる民』— 麦出版社
- 梅津順一 (2019) 『キリスト教学校教育同盟夏期研修資料』キリスト教学校教育同盟
- 大貫隆 他編 (2002) 『岩波 キリスト教辞典』 岩波書店
- 喜田川信 (1987) 『身体性と神学』 新教出版社
- 共同訳聖書実行委員会 (1987) 『聖書—新共同訳』 日本聖書協会
- 梶原直美 (2014) 『「スピリチュアル」の意味—聖書テキストの考察による一試論』 川崎医療福祉学会誌 Vol. 24 No. 1
- 小原克博 (1998) 『「神の像」に関する一考察—フェミニズムとエコロジーへの応答』 日本の神学
- 小原克博 (1998) 『身体論に関する神学的考察』 基督教研究 59 (2), 基督教研究
- 近藤勝彦 (2005) 『「神の似姿」としての人間とその意義』 『神学』 (67) 3-26』 東京神学大学神学会
- 坂本信 (2015) 『ホリスティック医療と信仰治療』 (第十一部会, 第73回学術大会紀要) 日本宗教学会
- 朴俊緒 (2004) 『神の像 (Imago Dei) に関する聖書の理解』 基督教研究 第66巻 第1号. pp.52-70
- 橋本典子 (1994) 『女性論についての断章』 青山学院女子短期大学総合文化研究所年報第2号所収

註

- 1 Webb-Mitchell, Brett P (2003): Christly Gestures: Learning to be Member of the Body of Christ, Grand Rapids, MI, 伊藤悟訳 (2019) 『キリスト教的ジェスチャー—キリストの体を生きる民』— 麦出版社. p.33によると、ジョン・ウェスターホフは、キリスト教教育を批判して次のように述べている。「次第に、私たちの関心は情報の伝達やスキルの上達に向けられるようになってきた。私たちはコンピューター化された教育方法と行動様式の虜になっている。キリスト教教育において「基本に返れ」というときにも、それは信仰や行いについての抽象的な知識の獲得、「事実」の暗記、そして聖書の権威への服従を強調することでしかなくなってしまった。」
- 2 九州・四国・沖縄における「キリスト教保育」を開講している5校中、本学のみ演劇的手法を用いている。
- 3 小原克博 (1998) 『身体論に関する神学的考察』 基督教研究 59 (2), 基督教研究, pp.41-42
- 4 大貫隆 他編 (2002) 『岩波 キリスト教辞典』 岩波書店, p591-592 ※執筆: 佐久間勤
- 5 前掲書., p591-592 ※執筆: 萩野弘之
- 6 Pannenberg, Wolhart (1991): Systematische Theologie Bd. II. Gottingen: Vandenhoeck und Ruprecht, p.211
- 7 大貫隆 他編 (2002) 『岩波 キリスト教辞典』 岩波書店, p595 ※執筆: 宮本久雄
- 8 前掲書., p234 ※執筆: 宮本久雄
- 9 朴俊緒 (2004) 『神の像 (Imago Dei) に関する聖書の理解』 基督教研究 第66巻 第1号, p.53
- 10 Moltmann, Jülgén (1985) Gott in der Schöpfung: Ökologische Schöpfungslehre. München:Chr. Kaiser Verlag= 1991 沖野政弘訳、『創造における神—生態論的創造論』, 新教出版社, pp.366-370
- 11 前掲書., pp.374-375
- 12 近藤勝彦 (2005) 『「神の似姿」としての人間とその意義』

- 東京神学大学神学会、神学 (67), p.14
- ¹³ 橋本典子 (1994) 『女性論についての断章』 青山学院女子短期大学総合文化研究所年報第2号所収, pp. 54-56
- ¹⁴ 梶原直美 (2014) 『「スピリチュアル」の意味 - 聖書テキストの考察による一試論』 川崎医療福祉学会誌 Vol. 24 No. 1. p.15
- ¹⁵ 小原克博 (1998) 『身体論に関する神学的考察』 基督教研究 59 (2), 基督教学研究, pp.46-47
- ¹⁶ Moltmann, Jülgen (1985) Gott in der Schöpfung: Ökologische Schöpfungslehre. München:Chr. Kaiser Verlag= 1991 沖野政弘訳、『創造における神—生態論的創造論』, 新教出版社, pp.343-351
- ¹⁷ 坂本信 (2015) 『ホリスティック医療と信仰治癒』 (第十一部会, 第73回学術大会紀要) 日本宗教学会, 2015 参照
- ¹⁸ 梶原直美 (2014) 『「スピリチュアル」の意味 - 聖書テキストの考察による一試論』 川崎医療福祉学会誌 Vol. 24 No. 1, p.11
- ¹⁹ 自由学園の教育実践については、日本ホリスティック協会 (2017) 『対話がつむぐホリスティックな教育』 創成社, p.149 参照
- ²⁰ 大貫隆 他編 (2002) 『岩波 キリスト教辞典』 岩波書店, p548-549 ※執筆者: 大貫隆
- ²¹ 前掲書., p313 ※執筆者: 青野太潮
- ²² Webb-Mitchell, p.29
- ²³ 梅津順一 (2019) 「日本におけるキリスト教学校の使命—過去と現在」 『2019年度キリスト教学校教育同盟西南地区夏期学校 (講演資料)』 キリスト教学校教育同盟. P2-4

Significance of “Body” in Christian Education

Ayako Higashi *

<Abstract>

The purpose of this paper is to consider the significance of “body”, which is often overlooked in Christian education. As an attempt to reflect on the influence of the mind-body dualism and recurrence to the Jewish/early Christian view of humanity, Genesis 1:27 and 2:7 are considered, based on the contemporary theology of Moltmann and Pannenberg. Based on this, Paul’s theology on “The Body of Christ” in I Corinthians 12, which is a representative description of the “body” in the New Testament, is presented and the significance of “body” was considered.

Keywords: Christian education, body, body of Christ, preschool education based on Christianity

* Department of Early Childhood Care and Education, Seinan Jo Gakuin University Junior College